

よこ みね  
**横峯 D 遺跡**

—農免農道整備事業南種子西部2期地区に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書—

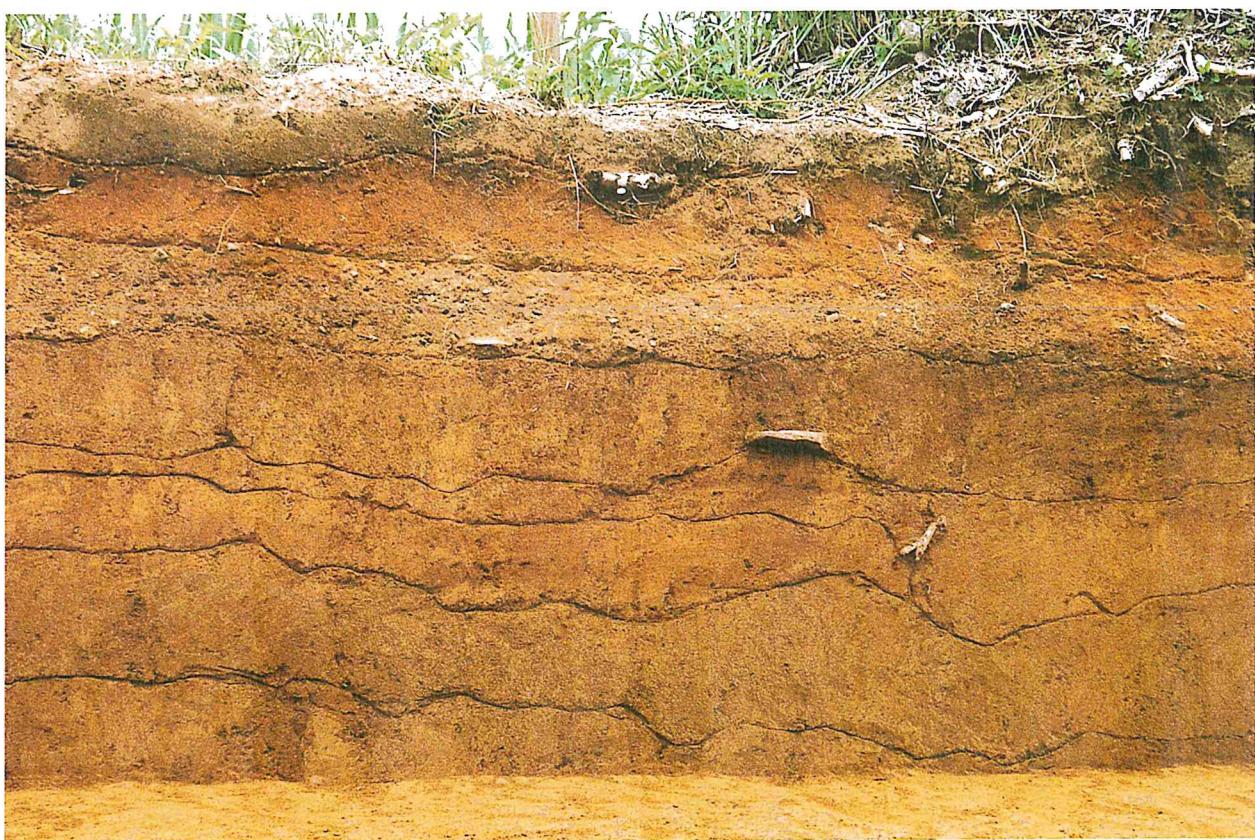
2005年3月

鹿児島県南種子町教育委員会





横峯D遺跡 遠景



横峯D遺跡 土層



## 序 文

埋蔵文化財は、日本の歴史や文化の成り立ちを知る上で貴重な歴史的遺産であり、国民共有の文化遺産として大切に守り伝えるべきものであります。

南種子町には、平成 15 年に県指定史跡となった横峯遺跡や、弥生時代から古墳時代へかけての埋葬址である広田遺跡などの全国的に有名な遺跡があります。この度、同じ横峯地区に位置する横峯 D 遺跡から鹿児島最古の土器である隆帯文土器が出土しております。種子島でこの隆帯文土器が発見されているのは他に 7 箇所の遺跡がありますが、西之表市の奥ノ仁田遺跡、鬼ヶ野遺跡、中種子町の三角山 I 遺跡のように住居跡を伴う大型の遺跡も発見されており、種子島が早い時期から想像以上の文化をもっていたことが伺えます。

本報告書は、鹿児島県農政部を事業主体とする農免農道整備事業南種子西部 2 期地区に伴い実施した横峯 D 遺跡の発掘調査報告書です。平成 7 年度の分布調査にはじまり平成 15 年度の全面調査までの永い年月を経てここにその報告書を刊行することができました。

本町では、今回の発掘調査の成果を後世に伝えるとともに、地域の文化財の普及啓発活動に活用したいと考えています。

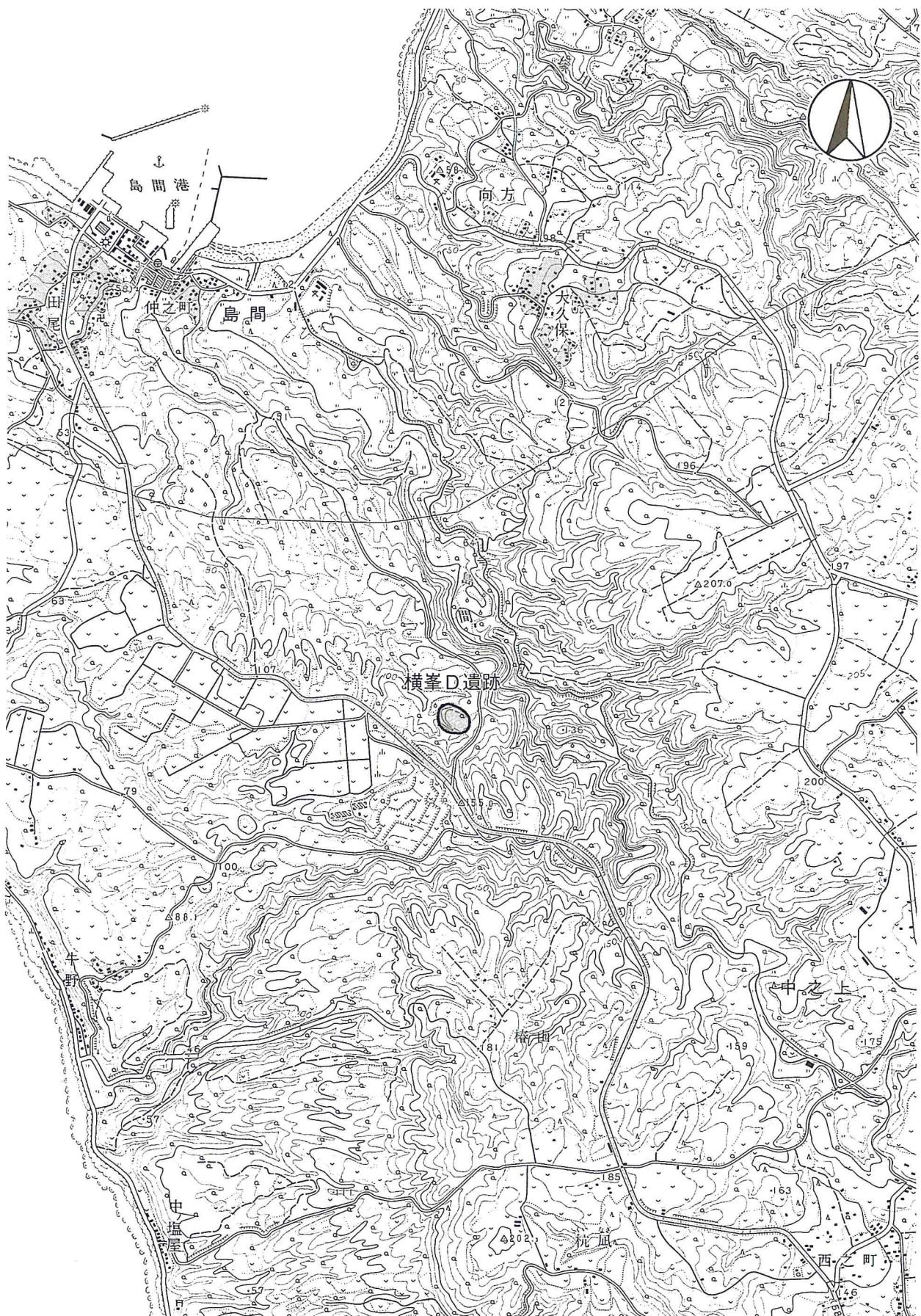
最後に、本報告書を刊行することができたのは、鹿児島県教育庁文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センターの方々をはじめ、関係各機関・各位のご指導・ご協力の賜と深く感謝の意を表します。

平成 17 年 3 月

南種子町教育委員会  
教育長 竹迫種俊

# 報告書抄録

ふりがな	よこみねDいせき							
書名	横峯D遺跡							
副書名	農免農道整備事業南種子西部2期地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	1							
シリーズ名	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	13							
編集者名	徳田有希乃・石堂和博							
編集機関	南種子町教育委員会							
所在地	〒891-3792 鹿児島県熊毛郡南種子町中之上 2793-1 TEL0997-26-1111							
発行年月日	2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よこみね 横峯D遺跡	かごしまけんくまげぐん 鹿児島県熊毛郡 みなみたねちょうしまま 南種子町島間 よこみね 横峯	5020	81-39	30° 26' 28"	130° 52' 47"	2002.6.2～ 2003.7.29	203 m <sup>2</sup>	農免農道 整備事業 西部中央 2期地区
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
横峯D遺跡	包含層	縄文時代 (草創期)			隆帶文土器・石斧・ 礫器・磨石・敲石・ 石皿			
		縄文時代 (早期)			土器・磨石・石皿			
		時期不明	溝状遺構 1条		磨敲石			



第1図 横峯D遺跡位置図 (S = 1/25,000)

## 例　　言

1. 本報告書は、南種子町教育委員会が鹿児島県教育庁文化財課と鹿児島県立埋蔵文化財センターの協力を得て実施した、農免農道整備事業南種子西部2期地区に伴う横峯D遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、確認調査を平成14年度、緊急発掘調査を平成15年度に実施し、報告書作成作業は平成16年度に実施した。
3. 本報告書に用いたレベル数値は、鹿児島県農政部（熊毛支庁土地改良課）が作成した地形図に基づく海拔高である。
4. 挿図の縮尺は各図ごとに示してある。
5. 遺物番号は、本文及び挿図・図版番号と一致する。
6. 本報告書の執筆は、徳田・石堂で行った。
7. 発掘調査における測量・実測・写真撮影は、徳田・石堂・峰山で行った。整理作業の実測とトレースは徳田・石堂・西園で行った。また、遺物写真撮影は、鹿児島県立埋蔵文化財センター横手浩二郎氏の協力を得た。
8. 本報告書の編集は徳田が担当した。

# 目 次

巻頭カラー 横峯D遺跡遠景・横峯遺跡土層

序文

報告書抄録

遺跡位置図

例言

第Ⅰ章 調査の経過.....	1
第1節 調査に至るまでの経過.....	1
第2節 調査の組織.....	1
第3節 確認調査.....	2
第4節 全面調査.....	2
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境.....	3
第1節 自然環境.....	3
第2節 歴史的環境.....	3
第Ⅲ章 調査の概要.....	9
第1節 調査の概要・方法.....	9
第2節 遺跡の層序.....	10
第3節 工事立会.....	14
第Ⅳ章 出土遺物.....	18
第1節 V層の遺物.....	18
第2節 IV層の遺物.....	23
第Ⅴ章 まとめ.....	25

# 表 目 次

第1表 遺跡地名表(1).....	7
第2表 遺跡地名表(2).....	8
第3表 土器観察表.....	24
第4表 石器観察表.....	24

## 挿図目次

第1図	横峯D遺跡位置図	
第2図	横峯D遺跡と町内遺跡分布図	6
第3図	横峯D遺跡標準土層	10
第4図	土層断面図(1)	11
第5図	土層断面図(2)	12
第6図	横峯D遺跡 調査区域及びトレンチ配置図	13
第7図	溝状遺構	14
第8図	溝状遺構出土遺物	14
第9図	横峯D遺跡グリッド図	15
第10図	確認調査遺物出土状況	16
第11図	全面調査遺物出土図	17
第12図	分布調査出土隆帶文土器	19
第13図	V層出土遺物(1)	20
第14図	V層出土遺物(2)	21
第15図	V層出土遺物(3)	22
第16図	IV層出土遺物	23
第17図	種子島の隆帶文土器出土遺跡分布図	26

## 図版目次

図版1	遺物出土状況	31
図版2	発掘調査風景	32
図版3	分布調査出土 隆帶文土器	33
図版4	横峯D遺跡出土土器	34
図版5	横峯D遺跡出土石器	35

# 第Ⅰ章 調査の経過

## 第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県農政部（熊毛支庁土地改良課／以下、県農政部）は南種子町島間地区において農免農道整備事業を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下、県文化財課）に照会した。

これを受けた県文化財課と県立埋蔵文化財センター及び南種子町教育委員会社会教育課（以下、町教育委員会）は、事業区域内の分布調査を実施した結果、横峯D遺跡（縄文時代草創期）の存在が判明した。

この分布調査の結果を基に、県農政部・南種子町農地整備課と町教育委員会は埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るために協議を行い、事業着手前に確認調査を実施することとなった。平成14年度に行なった確認調査の結果、縄文時代の包含層が確認された。

この調査結果を基に、県農政部・南種子町農地整備課と町教育委員会は遺跡の保存と事業の実施について協議した。その結果、事業計画の変更が不可能であることから、事業着手前に記録保存のための発掘調査を実施することとなり、平成15年度に全面調査を実施した。

整理及び報告書作成事業は、平成16年度に南種子町埋蔵文化財調査室で行った。

## 第2節 調査の組織

### 調査主体 南種子町教育委員会

調査総括	〃	教 育 長	高口 稔(平成9年～15年6月)
	〃	〃	竹迫 種俊(平成16年6月～)
調査事務	〃	社会教育課長	立石 靖夫(平成10～14年度)
〃	〃	〃	上山 幸夫(平成15年度～)
〃	〃	主 査	松山 りか(平成14年度)
〃	〃		豊島ますみ(平成15年度～)
確認調査	〃	文化財主事	石堂 和博(平成14年度～)
〃	〃	〃	徳田有希乃(平成14年度～)
緊急発掘調査	〃	〃	石堂 和博(平成14年度～)
〃	〃	〃	徳田有希乃(平成14年度～)
報告書作成	〃	〃	徳田有希乃(平成15年度)
〃	〃	〃	石堂 和博(平成15年度)
調査指導者	鹿児島大学法文学部	教 授	森脇 宏(平成15年度)

### 発掘調査作業従事者

- ・久保田かおり、寺川順子、小山田鶴子、森誠子、頓所美佐子、今村スイ子、大川三枝子、古市総

代, 立石英幸, 大嵐まり子, 小山孝幸, 脇田和江, 柳田弘, 峯山鈴子, 稲川ナナ子, 田村勝也,  
園田順子, 泊口直江, 立石巧, 立石静憲

#### 報告書作成作業従事者

- ・西園六代, 飯田寧子, 川元さつき, 砂坂理香

なお, 整理作業においては下記の方々にご教示・ご助言をいただいた。記して謝意を表します。(50音順)

黒川忠広・坂口浩一・堂込秀人・中村真理・西園勝彦・宮田栄二・横手浩一郎

### 第3節 確認調査

確認調査は平成14年9月9日から平成14年10月18日までの16日間行った。調査対象地区は、標高約110mで両側を小さな谷に挟まれた八つ手状を呈する台地の尾根上に位置する。

トレンチ設定は、地形を考慮しながら2m×4mを基本とし、合計6トレンチ設定した。調査の結果、2トレンチ、4トレンチから縄文時代草創期の遺物、6トレンチからは縄文時代早期の遺物が確認され、遺物包含層の存在が認められた。

### 第4節 全面調査

緊急発掘調査は平成15年6月2日～平成15年7月29日（実働21日間）に実施した。

以下、調査の経過については日誌抄にて記載する。

#### 平成15年6月2日(月)～6月6日(金)

オリエンテーション。プレハブ・重機の搬入。調査区域の樹木伐採。グリッド設定。重機により、アカホヤ直下の礫層までの剥ぎ取りを行う。作業員によりⅣ層の掘り下げを開始する。

#### 6月10日(火)～13日(金)

V層を掘り下げる。南種子中学校2年生4名が職場体験学習で遺跡発掘作業に参加。

#### 6月18日(水)～27日(金)

VI層サツマ下層、VII、VIII層の粘質土掘り下げ。

#### 7月7日(月)～29日(火)

乾燥が激しいため頻繁に散水を行う。鹿児島大学の森脇宏教授により火山灰及び周辺地形について指導をいただく。調査区階段部分の掘り下げ。土層断面等の実測。

調査終了。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 自然環境

南種子町の所在する種子島は、大隅半島最南端の佐多岬から南東約40kmの洋上に位置する。面積447.09km<sup>2</sup>、延長52km、幅12kmで野間の地峡部では約6kmにしか過ぎない。島の長軸方向は、北北東から南南西に細長く伸びており、九州本土や琉球列島の配列にほぼ近い。亜熱帯性自然の北縁部で太平洋のサンゴ礁の北限にあたり、島の南東を黒潮の本流が流れる。最高海拔は、282.3mと比較的平坦な地形をしており、九州最高峰の宮之浦岳（標高1,935m）を有する屋久島とは対照的な島である。

地質構造においては島全体に海岸段丘がよく発達しており、東西方向に走る断層によって北部・中部・南部の三区域に分けられる。南種子町は種子島の南部に位置し、東西南の三方向が海に面し北は中種子町を境にする。面積は110.21m<sup>2</sup>で熊毛諸島の各市町の中では最も狭い。地形は長谷原尾の212.2mを最高点とし、内陸部は海拔約200m前後の丘陵地帯で平坦な台地を形成する。海岸段丘は、西海岸の島間から門倉岬にかけてよく発達している。高度100mの段丘が一番顕著で、海岸線に沿って南北に延びている。また、この下位に高度60mの段丘面があり、集落を形成するが急傾斜を成して海に迫っている。東海岸は著しく開析を受けた100m以下の台地で、谷系の発達が著しく海岸段丘は殆ど見られない。

南種子町の地質は、基盤を成す熊毛層群（砂岩と頁岩の互層）が広く分布し、西海岸においても熊毛層群が見られる。南種子町の中心地、上中付近から東海岸にかけては、緩やかに傾斜しながら田代層、河内層、大崎層の順に茎永層群が基盤の熊毛層群を覆っている。横峯D遺跡の所在する南種子町島間周辺の地質構造は、古第三紀の熊毛層群を基盤とする。熊毛層群は堅緻最上部では、第四紀の火山灰層が複数確認されており、横峯遺跡や立切遺跡の調査等で鍵層として活用されている。

南端の門倉岬は、1543年に鉄砲が伝來した岬であり、南東海岸には日本最大の宇宙開発基地種子島宇宙センターが所在する。

横峯D遺跡は、鹿児島県熊毛郡南種子町大字島間に所在する。地理的には上中市街地から島間方向へ国道58号線を約4km進んだ町道古川一里塚線を跨いだ形で位置する。国道を挟んで約500mの所には、横峯遺跡が所在する。標高約110mで両側を小さな谷に挟まれた八つ手状を呈する台地の尾根状に位置する。

### 第2節 歴史的環境

南西諸島は、大きく三つの文化圏に分けられる。九州本土の文化を強く受けている薩南諸島（種子島・屋久島）を北部圏、南九州の影響を受けつつも独自の土器文化圏を発達させた地域（奄美諸島・沖縄諸島）が中部圏、日本文化の影響が殆ど及ばず台湾・フィリピンなどの強い南方文化が特色の地域（先島諸島）が南部圏である。

以下、北部圏に属する種子島の南種子町所在の遺跡を中心に時代ごとに記述したい。

## 旧石器時代

種子島で初めて旧石器時代の遺跡が確認されたのは、1992年の横峯遺跡（21）の発掘によってであり、AT火山灰、種IV火山灰、種III火山灰等の鍵となる火山灰層に挟まれた文化層から後期旧石器時代初頭の礫群をはじめ、敲石などの石器がみつかっている。1996年には鮫島安豊氏らにより細石核が西之表湊遺跡で表採され、細石器文化も確認された。その後、立切遺跡において後期旧石器初頭の遺構・遺物が検出され、大中峯遺跡・三角山I遺跡・銭亀遺跡（24）などで船野型の細石核が確認されている。

## 縄文時代

草創期の遺跡は、隆帶文土器が表採された横峯遺跡・横峯D遺跡（39）がある。種子島では、西之表市奥ノ仁田遺跡・鬼ヶ野遺跡・中種子町三角山I遺跡などに類似する土器が出土しており、大量の遺物と共に隆帶文土器に伴う住居址も確認されており、種子島における縄文時代草創期の様相を知る上で注目される遺跡である。

早期の遺跡は、岩本式土器の出土が上平遺跡（35）、園田遺跡、西俣遺跡で知られる。西俣遺跡では、早期円筒形土器の外底部に網代圧痕が確認される資料が1点あり、縄文後期によく見られる網代痕が、早期まで遡ることを示し興味深い。吉田式土器の出土した長谷遺跡（1）、昭和62年に発掘調査を行い塞ノ神式土器の出土した小牧遺跡（14）、平成7年に発掘調査を行い塞ノ神式土器や磨製石鏃の出土した石ノ峯遺跡（36）、平成14年に苦浜式土器などが表採された枯木野隅遺跡（72）がある。押型文土器は、西之表市国上久保田遺跡でアカホヤ火山灰層下層より崖面表採されており（潮流3号）、手向山式土器に該当する。中種子町油久奈佐田遺跡でも押型文土器が確認されているようだが（鹿児島県市町村別遺跡地名表）、資料は現在確認することが出来ず、また記載の経緯も不明である。

前期の遺跡では、昭和62年に発掘調査をした平六間伏遺跡（15）、赤石牟田遺跡（2）、轟式土器の出土した上平遺跡（35）などがある。

後期の遺跡は、一湊式土器だけの単純遺跡である野大野A遺跡（18）や、茶木久保遺跡（23）、田尾遺跡（4）、市来式土器・丸尾式土器の出土した松原遺跡（11）大規模な配石遺構で知られる藤平小田遺跡（38）などがある。西之表市大花里一之鳥居貝塚は、指宿式土器を主体とする後期の土器が表採されている。なかでも磨消縄文土器が確認されていて、注目される（潮流第3号）。

晩期の遺跡は、黒川式土器や人骨・貝製品などの出土した一陣長崎鼻貝塚（5）、松原遺跡（11）などがある。中種子町大園遺跡は、縄文時代晩期の黒川式土器を主体とする遺跡で、器壁が約1.5cmと厚く、粗製の土器である。また、丹塗りの研磨土器で大洞C2式土器の特徴を残すものも1点確認されており、注目される。

## 弥生時代

平山の広田海岸に面する砂丘に立地する埋葬遺跡の広田遺跡（25）が著名である。100体以上の

人骨が3層にわたり、異なった習俗で埋葬され、副葬品に南海産の貝を利用した夥しい数の貝製品を使用し、この中の貝符に中国文化との関係を示すものが出土している。その他の遺跡には、本村塚の峯遺跡（8）、本村丸田遺跡（9）、浜田嵐遺跡（6）がある。

## 歴史時代

平安時代の掘立柱建物跡の検出された本村丸田遺跡（9）が知られている。中世の遺跡としては、藤平小田遺跡や中世の山城とされる上妻城址（13）が知られている。大園遺跡では、中世の掘立柱建物跡が5棟検出されている。

### [参考文献]

南種子町教育委員会	「本村丸田遺跡」	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)	1986
〃	「小牧遺跡・平六間伏遺跡」	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)	1988
〃	「野大野A遺跡・上瀬田A遺跡」	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)	1991
〃	「横峯遺跡」	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)	1993
〃	「松原遺跡」	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)	1993
〃	「石ノ峯遺跡」	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)	1996
〃	「摺久保遺跡・ヌカス遺跡・嵐遺跡・今平遺跡」	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)	1996
〃	「横峯C遺跡」	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(8)	2000
〃	「藤平小田遺跡」	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)	2003
〃	「錢龜遺跡」	埋蔵文化財発掘調査事業報告書	2000
中種子町教育委員会	「立切遺跡」	中種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)	2002
〃	「立切遺跡」	中種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)	2003
西之表市教育委員会	「奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡」	西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(7)	1995
西之表市教育委員会	「鬼ヶ野遺跡」	西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(14)	2004
盛園尚孝	「広田遺跡に関する調査報告書」		1995
広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県立歴史資料センター黎明館	「種子島 広田遺跡」		2003
南種子町郷土誌編纂委員会	「南種子町郷土誌」		1987
南種子町教育委員会	「南種子町の民俗」		1995
鹿児島県立埋蔵文化財センター	「三角山I遺跡(P地点)」		2002
桑畑武志・大久保浩二	人類史研究12「種子島の細石器－西之表市大中峯遺跡資料の紹介－」		2000
種子島考古学研究会	「潮流」第1号		1978
鹿児島県立埋蔵文化財センター	「柿内遺跡・大園遺跡・西俣遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(24)		1999



第2図 横峰D遺跡と町内遺跡分布図

第1表 遺跡地名表(1)

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
81-1	長谷	中之上赤石牟田	台地	縄文(早期)	吉田式	表面調査による出土
81-2	赤石牟田	〃	〃	縄文(早期・前期)	曾畠式・塞ノ神式・石鎌・黒耀石片・石匙・石斧・集石	平成4年分布調査
81-3	野大野	西之 野大野	〃	縄文(後期)	市来式・磨製石斧・敲石	表面調査による出土
81-4	田尾	島間 田尾	〃	〃(〃)	市来式・磨製石斧磨石・敲石・石皿	〃
81-5	一陣長崎貝塚	中之下 一陣	低地	縄文(晚期)	黒川式・磨製石斧・骨製髮飾り・骨錐・貝輪・人骨・獸魚骨・貝類	昭和31年発掘調査
81-6	浜田嵐	平山 嵐シ	〃	弥生(中期)	土器片(須玖式)	
81-7	広田	平山 奥ノ園	〃	弥生(中期・後期) 古墳(前期)	弥生土器・人骨113体余・貝製品・紡錘車・石錐・鐵製釣針・獸魚骨・貝類	昭和32~34年発掘調査埋葬址考古学雑誌43巻3号・日本考古学協会発表(24回総会)・福岡医学雑誌52巻8号・種子島民族集7号広田の民族
81-8	峯	西之塚の峯	山地	弥生(後期)	土器片	
81-9	本村丸田	西之 丸田	〃	縄文(後期) 弥生(後期) 平安	指宿式・市来式・曾畠式・石斧・磨石・弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器	昭和60年発掘調査
81-10	本村宇都	西之宇都	〃	弥生(後期)	土器片	
81-11	松原	茎永 堤ノ小田	低地	縄文(後期・晚期) 古代	集石・市来式・丸尾式・指宿式・石斧・磨石・石皿・土師器・須恵器・青磁	平成4年発掘調査
81-12	上里城址	茎永 野久尾山	山地	中世		中世城跡(昭和58年県文化課調査)
81-13	上妻城址	島間 内城	〃	〃		〃(〃)
81-14	小牧	中之上 小牧	台地	縄文(早期)	塞ノ神式・磨石・敲石	昭和62年発掘調査
81-15	平六間伏	中之上平六間伏	〃	縄文・古墳	土器片・石斧	〃
81-16	上瀬田A	西之 上瀬田	〃	縄文	土器片	平成2年確認調査
81-17	上瀬田B	〃	〃	〃	〃	昭和63年分布調査
81-18	野大野A	西之 野大野	〃	縄文(後期)	一湊式・敲石・磨石・石皿	平成2年発掘調査
81-19	横峯A	島間 横峯	〃	縄文	土器片	平成3年分布調査
81-20	横峯B	〃	〃	縄文(早期)	土器片・磨製石斧	平成4年確認調査
81-21	横峯C	〃	〃	旧石器・縄文(草創期・早期)	砾群・礫器・隆帶文・集石・石鎌・石斧・敲石・塞ノ神式・苦浜式・轟式	平成4・8~10年発掘調査
81-22	下鹿野	島間 下鹿野	〃	縄文・古代・中世	石鎌・土器片	平成13年分布調査(周知の遺跡拡大)
81-23	茶木久保	島間 茶木久保	〃	縄文(後期)	土器片・石鎌	平成6年確認調査
81-24	錢龟	西之 錢龟	〃	縄文(早期)	下剥峯式・桑ノ丸式・天道ヶ尾式・前平式・マイクロコア・マイクロブレード	平成12年発掘調査
81-25	駒取野	西之 駒取野	〃	縄文	土器片	平成4年分布調査
81-26	安久保	西之 安久保	〃	縄文(早期)	吉田式	〃
81-27	西之	西之 大宮田	低地	中世	染付・土師器	〃
81-28	真所汐入A	中之下 東真所汐入	〃	〃	染付・青磁・白磁・土師器	〃
81-29	汐入	茎永上松原汐入	〃	〃	製塩土器	〃
81-30		茎永 松原山	〃	縄文	台石	〃
81-31	友心汐入A	茎永 友心汐入	〃	中世	土師器	〃
81-32	友心汐入B	〃	〃	〃	〃	〃
81-33	福ヶ野A	平山 福ヶ野	台地	縄文	土器片	〃
81-34	福ヶ野B	〃	〃	縄文(前期・後期)・古墳	縄文土器・成川式	〃
81-35	上平	平山 上平	〃	縄文(早期・前期)・中世	岩本式・轟式・石鎌・石斧・青磁	平成10年発掘調査

第2表 遺跡地名表(2)

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
81-36	石ノ峯	中之上 石ノ峯	台地	縄文(早期)	磨製石鎌・磨石・敲石・石皿 塞ノ神式・平格式	平成7年発掘調査
81-37	摺久保	中之上 摺久保	ヶ	縄文(早期) 弥生	塞ノ神式・弥生土器片	平成7年確認調査
81-38	藤平小田	島間 藤平小田	ヶ	縄文(後期) 中世	市来式・丸尾式・指宿式・松山式・ 一湊式・台付皿など・石鎌・石斧・ 磨石・敲石・凹石・石皿・石製品など・ 配石遺構・集石・大型土坑・染付・ 土師器・青磁・掘立柱建物跡	平成10年発掘調査により消滅
81-39	横峯D	島間 横峯	ヶ	縄文(草創期)	隆帶文	平成7年分布調査・平成13年確認調査
81-40	塩浦田	西之 塩浦田	ヶ	古代	土器片	平成13年確認調査
81-41	今平	西之 下今平	ヶ	縄文(早期)	塞ノ神式・轟式・石鎌・石匙・チップ	平成13年発掘調査
81-42	新牧	西之 新牧	ヶ	ヶ(ヶ)	土器片・石鎌・石皿・石斧	平成9年発掘調査
81-43	橋久保	西之 橋久保	ヶ	旧石器	疊群	平成13年確認調査
81-44	龍庵坂	西之 龍庵坂	ヶ	縄文(早期)	前平式・吉田式・石鎌	平成13年発掘調査
81-45	横峯E	島間 横峯	ヶ	旧石器・縄文		平成10年分布調査(周知の遺跡の隣接地)
81-46	稲野	島間 稲野	ヶ	弥生	土器片	平成10年分布調査
81-47	丸野	中之上 丸野	ヶ	縄文	ヶ	ヶ
81-48	笹	中之上 笹	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ
81-49	徳丸ヶ野	西之 徳丸カノ	ヶ	縄文(後期)・中世	市来式・丸尾式・松山式・磨石・敲石・石皿	周知の遺跡平成10年分布調査
81-50	高鼻	西之 高鼻	ヶ	古墳	土器片	平成10年分布調査
81-51	有尾	中之上 有尾	ヶ	縄文	ヶ	平成7年分布調査
81-52	高峯	島間 高峯	ヶ	縄文(後期)	ヶ	平成10年確認調査
81-53	西大曲	中之下 西大曲	ヶ	縄文	ヶ	平成7年分布調査
81-54	椿山A	中之上 椿山	ヶ	ヶ	ヶ	平成8年分布調査
81-55	椿山B	ヶ	ヶ	縄文(早期)	塞ノ神式	ヶ
81-56	堂ノ中野	中之下堂ノ中野	ヶ	縄文	土器片	平成9年分布調査
81-57	有鹿野	島間 有鹿野	ヶ	縄文(後期)	市来式・磨石・敲石・石斧	平成13年分布調査(周知の遺跡拡大)
81-58	椿山C	中之上 椿山	ヶ	縄文	土器片・磨石	表面調査による出土
81-59	広田Ⅱ	平山 奥浜渡	低地	近世	人骨4体・寛永通宝	平成11年発掘調査
81-60	神山峯	西之 神山峯	台地	縄文	磨石・土器片	平成13年分布調査
81-61	長畑	西之 長畑	ヶ	ヶ	土器片	ヶ
81-62	高田	中之下 高田	低地	中世	ヶ	ヶ
81-63	濱ノ田汐入	中之下濱ノ田汐入	ヶ	古代・中世	ヶ	ヶ
81-64	真所汐入B	中之下西真所汐入	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ
81-65	真所汐入C	ヶ	ヶ	中世	ヶ	ヶ
81-66	日ノ丸	西之 本村	ヶ	古代	ヶ	ヶ
81-67	久保田	中之下 久保田	ヶ	中世・近世	ヶ	ヶ
81-68	坂元田	中之下 坂元田	ヶ	古代・中世	ヶ	ヶ
81-69	植松	西之 植松	台地	縄文	ヶ	ヶ
81-70	藤七畠	中之下 藤七畠	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ
81-71	広田Ⅲ	平山 大町汐入	低地	縄文(後期)	ヶ	平成8年分布調査
81-72	枯木野隅	中之上 枯木野隅	台地	縄文(早期)	苦浜式土器・石匙・磨石	平成14年分布調査

## 第3章 調査の概要

### 第1節 調査の概要・方法

今回の調査は農免農道整備事業を起因事業とする緊急発掘調査である。平成7年度に分布調査、平成14年度に確認調査、平成15年度に本調査が実施された。確認調査は平成14年9月9日～10月18日まで実働16日間、本調査は平成15年6月2日～7月29日まで実働21日間実施した。

調査面積は確認調査が50m<sup>2</sup>、本調査が203m<sup>2</sup>である。

#### 1. 確認調査

平成7年度に行った分布調査で、工事区域横の土手より隆帶文土器を十数点採集している。

トレンチは2m×4mを基本とし、分布調査の結果を基に、施工区域内の土手を中心として3本、一段低くなるさとうきび畑内に1本、また古川一里塚線を跨いだ反対側の施工区域にも2本設定した。但し、畑にはサツマイモやサトウキビ等が耕作されているため、耕作者の同意を得て作物の収穫後調査を行った。

調査の結果、2トレンチ、4トレンチからIV層縄文時代早期相当層の遺物を、6トレンチではIV層の他V層縄文時代草創期層の遺物が出土した。遺構は確認されなかった。

#### 2. 緊急発掘調査

調査は、平成15年6月2日から7月29日まで実働21日間実施した。

本調査は、現道と畑にはさまれ削平されず現存していた部分を対象として行われた。計画路線の中心線を基準に10m×10mのグリッドを始点（B P）側からA-1区・2区と設定した。

調査方法は、樹木伐採を行ったあと表土と攪乱層を重機で剥ぎ取り、遺物包含層は作業員により慎重に掘り下げた。

今回の調査面積は203m<sup>2</sup>であった。調査の結果、IV層、V層から遺物が出土した。V層からは縄文時代草創期の隆帶文土器が出土している。

調査終了後は、重機により土を埋め戻した。

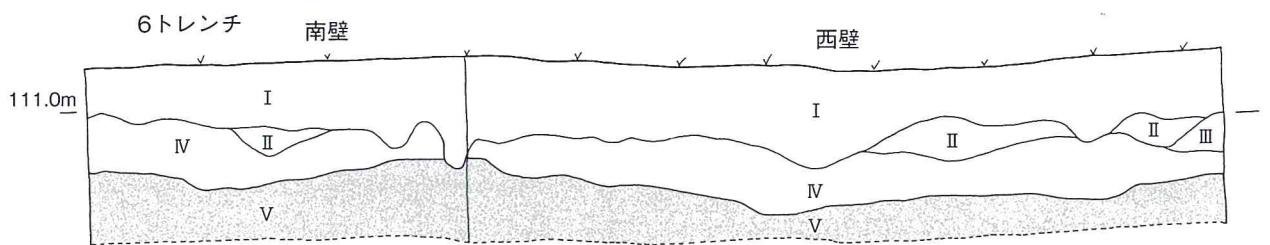
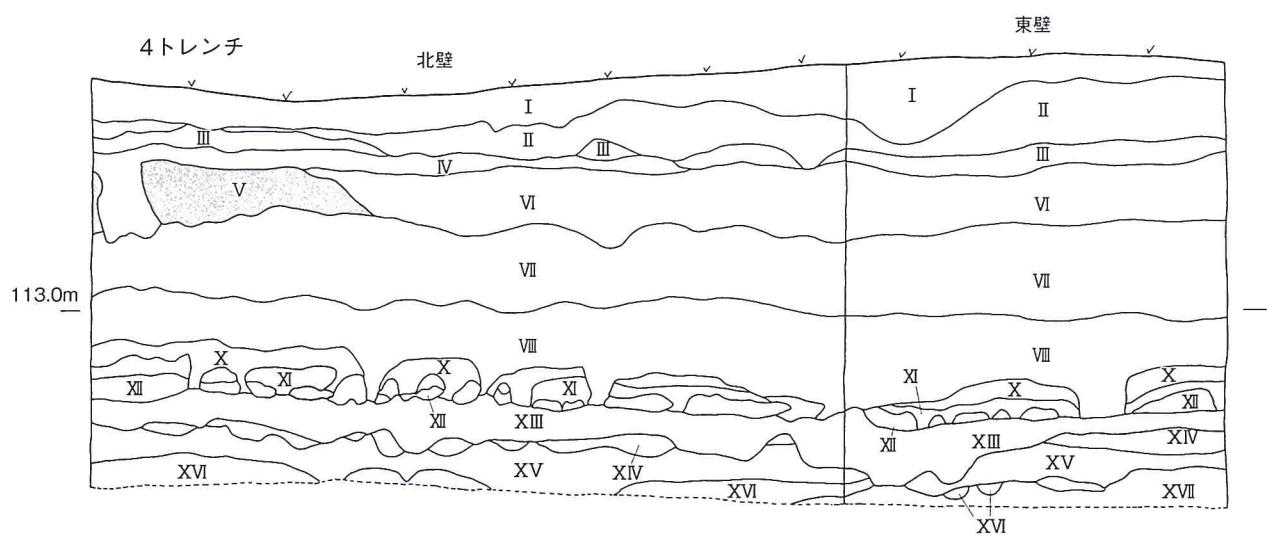
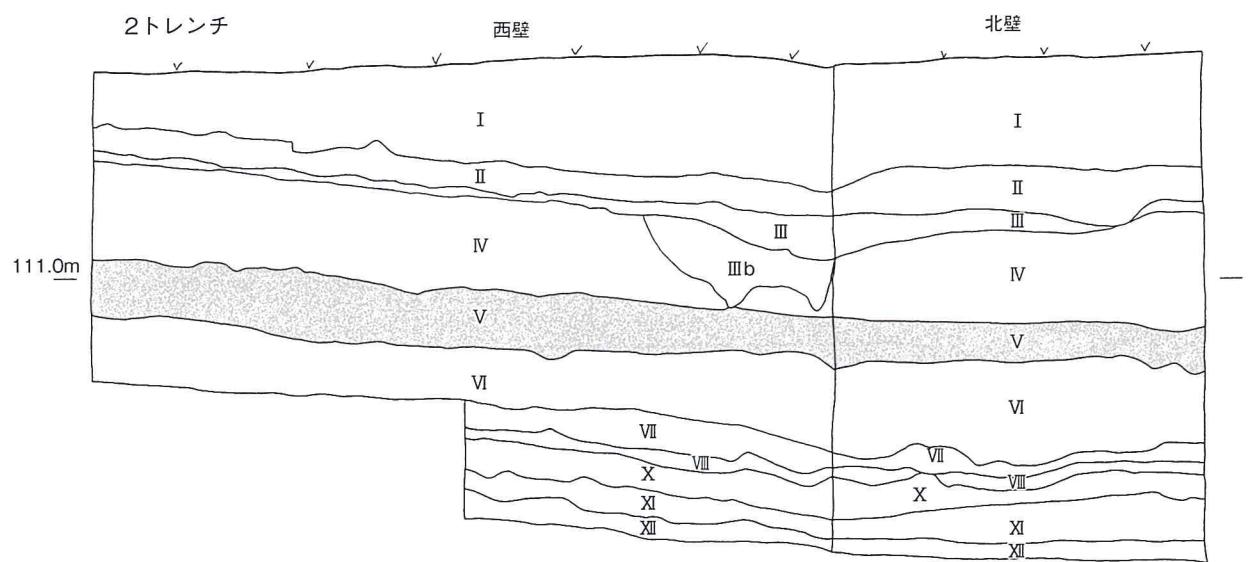
## 第2節 遺跡の層序

調査区域内で若干の違いはあるが、標準土層は下記のとおりである。

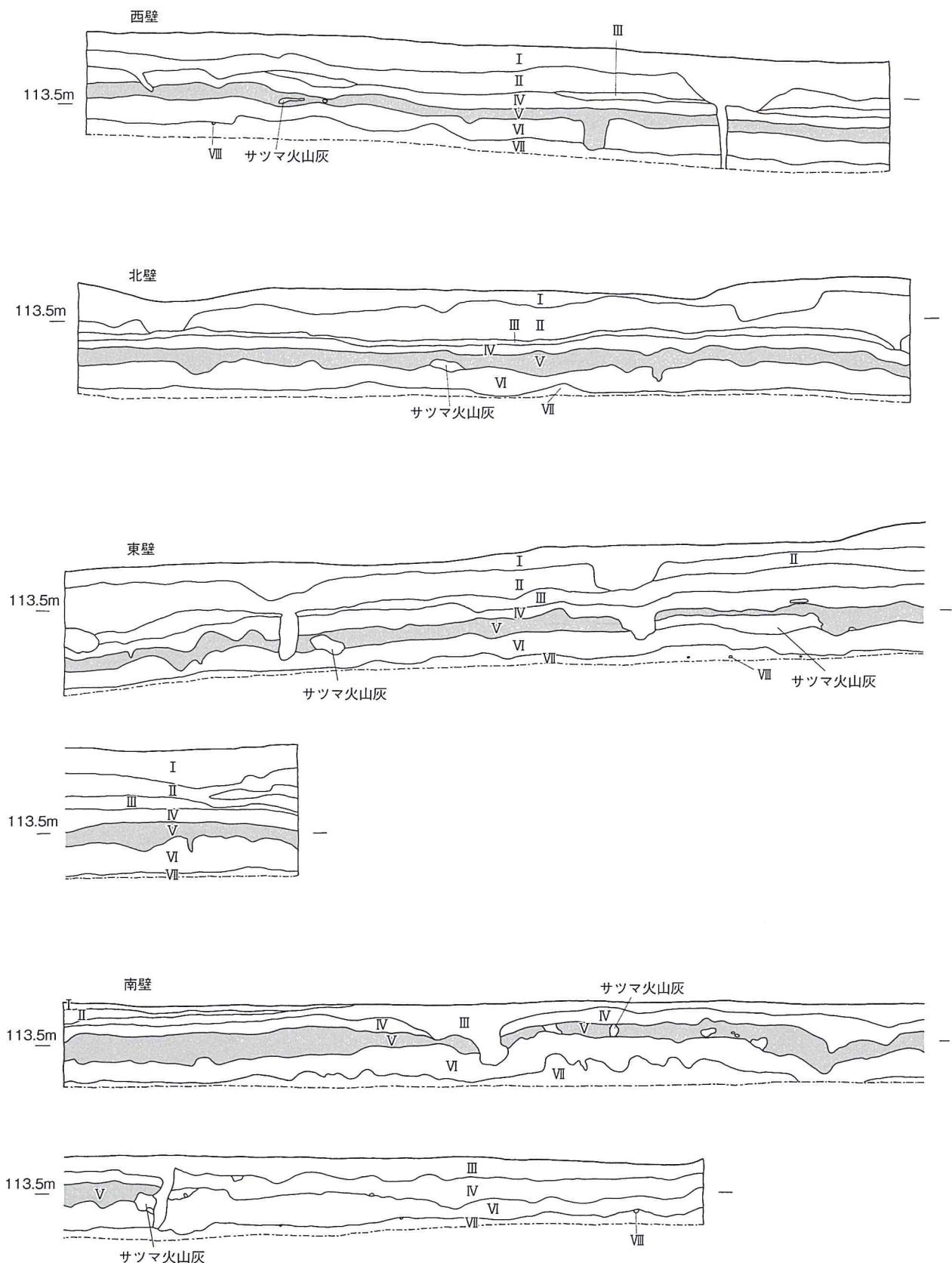


I 層	I 層 表土
II 層	II 層 暗黄橙色火山灰 アカホヤ火山灰（幸屋火碎流）
III 層	III 層 黄褐色砂利 砂利を多く含む（二次堆積か）。
IV 層	IV 層 暗褐色粘質土 遺物包含層（縄文早期相当）
V 層	V 層 暗黄褐色土 遺物包含層（縄文草創期相当） サツマ火山灰がブロック状に混在する。
VI 層	VI 層 褐色土 層との境目が明瞭ではない。
VII 層	VII 層 暗褐色強粘質土 粘性が高い。
VIII 層	VIII 層 青灰質スコリア 火山噴出物であるが、起源は不明。VII層に若干混在する。

第3図 横峯D遺跡標準土層

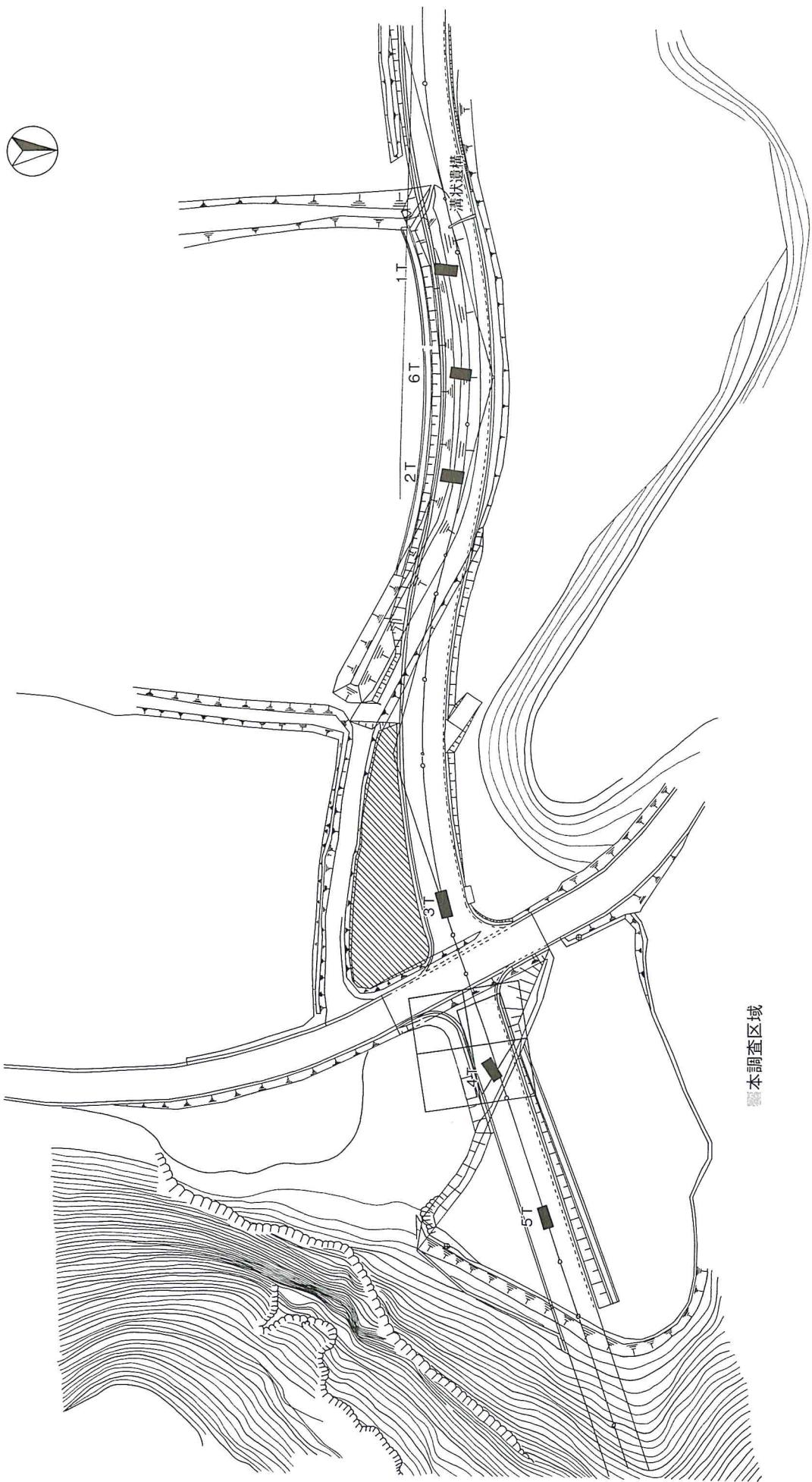


第4図 土層断面図(1) (S = 1/40)



第5図 土層断面図(2) (S = 1/60)

第6図 横峯D遺跡 調査区域及びトレンチ配置図 ( $S = 1/1,000$ )

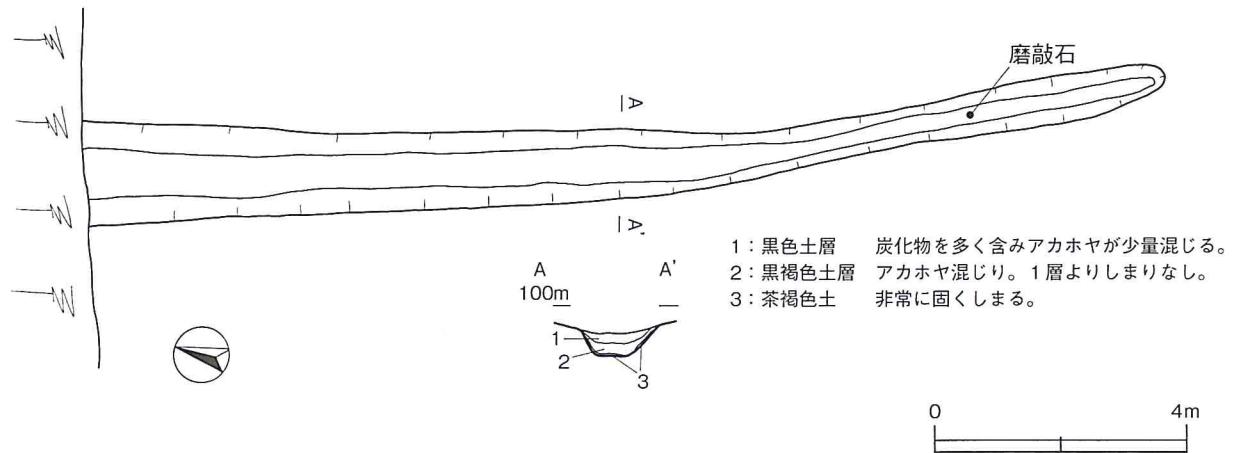


### 第3節 工事立会

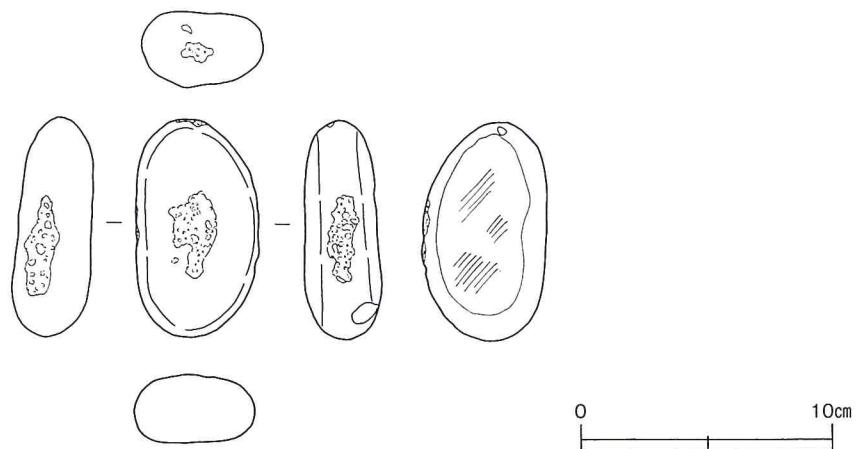
平成14年度の確認調査において、遺物が出土したのは2・4・6トレンチであった。この確認調査の結果、道路から西側区域は、現在畑の防風壁である土手部分以外は遺物の出土する可能性は低いと考えられたため、事業者に引き渡した。土手の部分は遺物が検出されていたため工事立会を行った。

工事立会の結果、石皿が2点V層から出土したほか、黒色土を埋土とする溝状遺構が1条検出された。溝状遺構は緩やかな立ち上がりを呈し、長さ約8.6m、最大幅約0.8m、深さ約20cmで、南に行くにつれて浅くなっていく。溝状遺構の埋土は3層に分かれ、下層の3層は1cm程度で薄く底部や側面にみられ、非常に固く締まる。埋土となる黒色土は確認調査では確認されなかったものであるため、時代の特定は出来なかった。

この溝状遺構の南側部分より磨痕と敲痕の見られる磨敲石が1点出土している。溝状遺構の床に接して出土した、長さ8.6cm、幅4.8cm、厚さ3.1cmの砂岩製の磨敲石である。

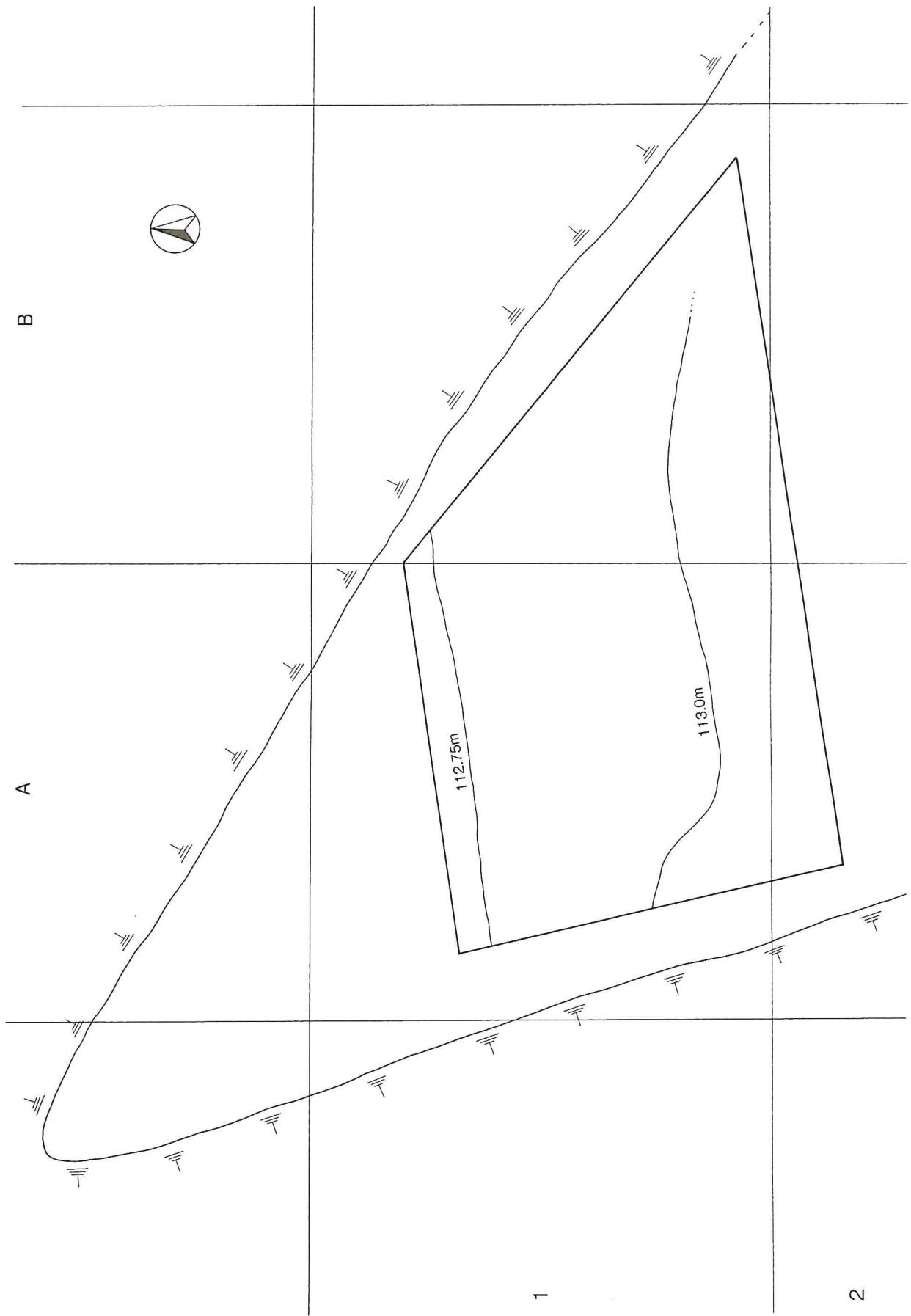


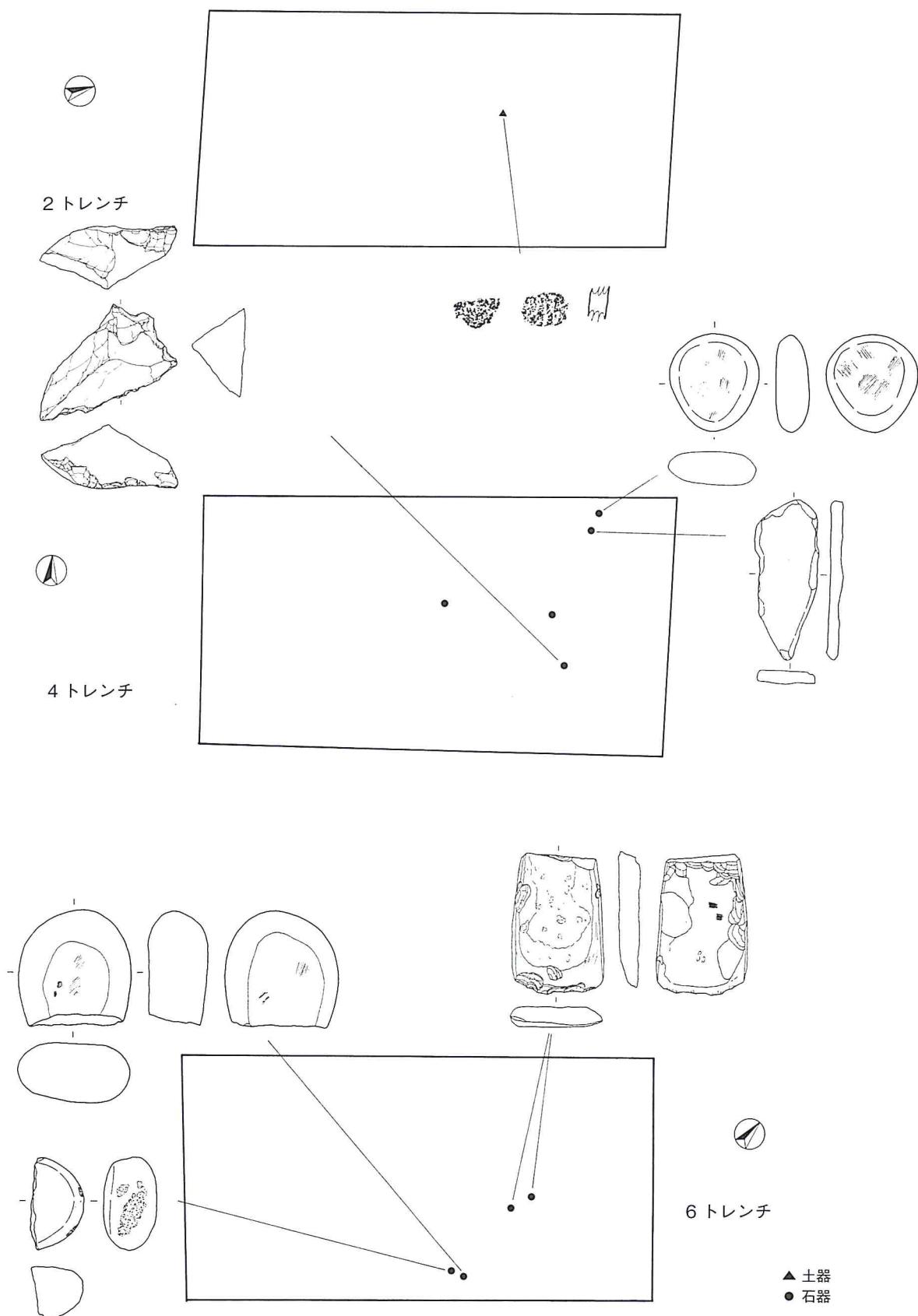
第7図 溝状遺構



第8図 溝状遺構出土遺物

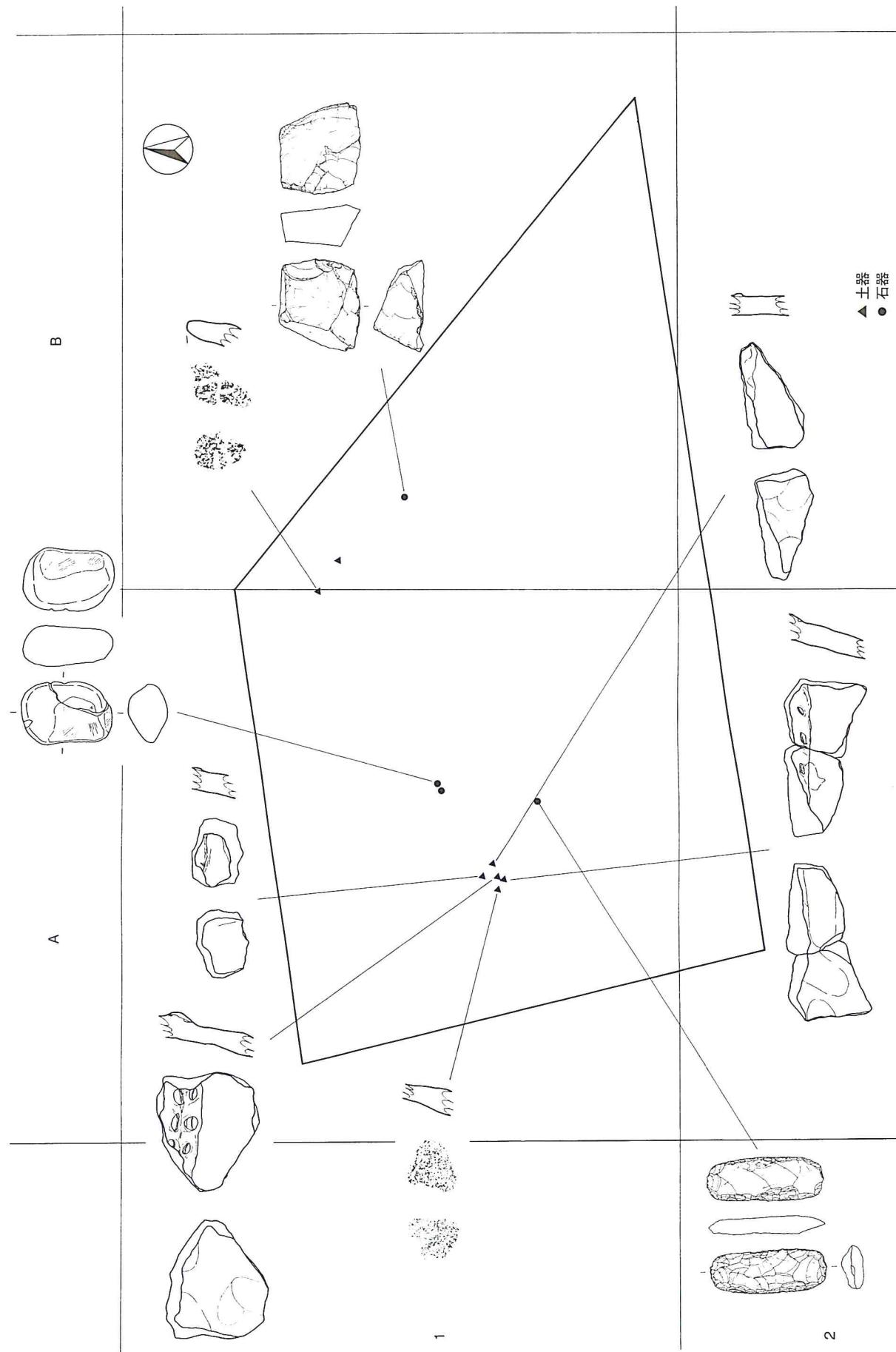
第9図 横峯D遺跡グリッド図 ( $S = 1/120$ )





第10図 確認調査遺物出土状況 (S = 1/50)

第11図 全面調査遺物出土図 ( $S = 1/100$ )



## 第IV章 横峯D遺跡 出土遺跡

### 第1節 分布調査出土土器

今回の調査区からは若干はずれるが、平成7年度に行った分布調査で2トレンチと3トレンチとの間に位置する土手の端部より隆帶文土器が採集されている。この土手は畠の防風壁として残されていたもので、アカホヤ火山灰層より下の層から採集された。土器については、「いずれも赤褐色を呈しており、焼成は悪く極めて脆い。器壁はやや厚い大型深鉢の胴部片で、採取された部分でも38cmの径を測る。表裏ともに横ナデ調整であるが、仕上げは粗悪で指オサエや接合部も観察される。器壁に約5cmの間隔で3条の隆帶が貼り付けられている。この隆帶上には、指頭もしくは範状工具による圧痕が連続して施文されている。」(2000 堂込)とある。

### 第2節 V層の出土遺物

V層からは土器が7点、石器が9点出土した。

#### 1 土器 (第12図 1~6)

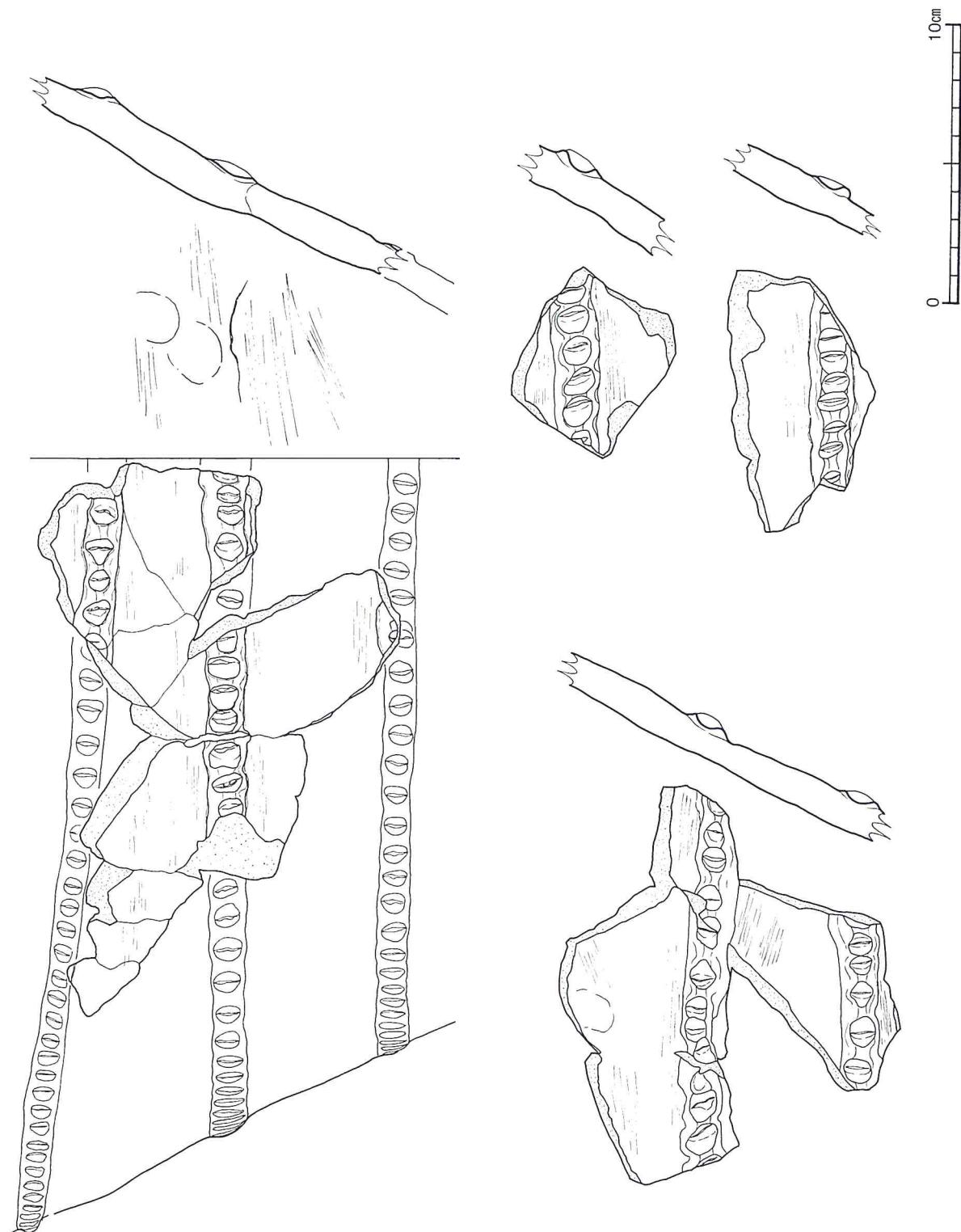
土器の出土は微量で、A-1区とA-2区で数点出土するのみでほかのグリッドでは出土しなかった。

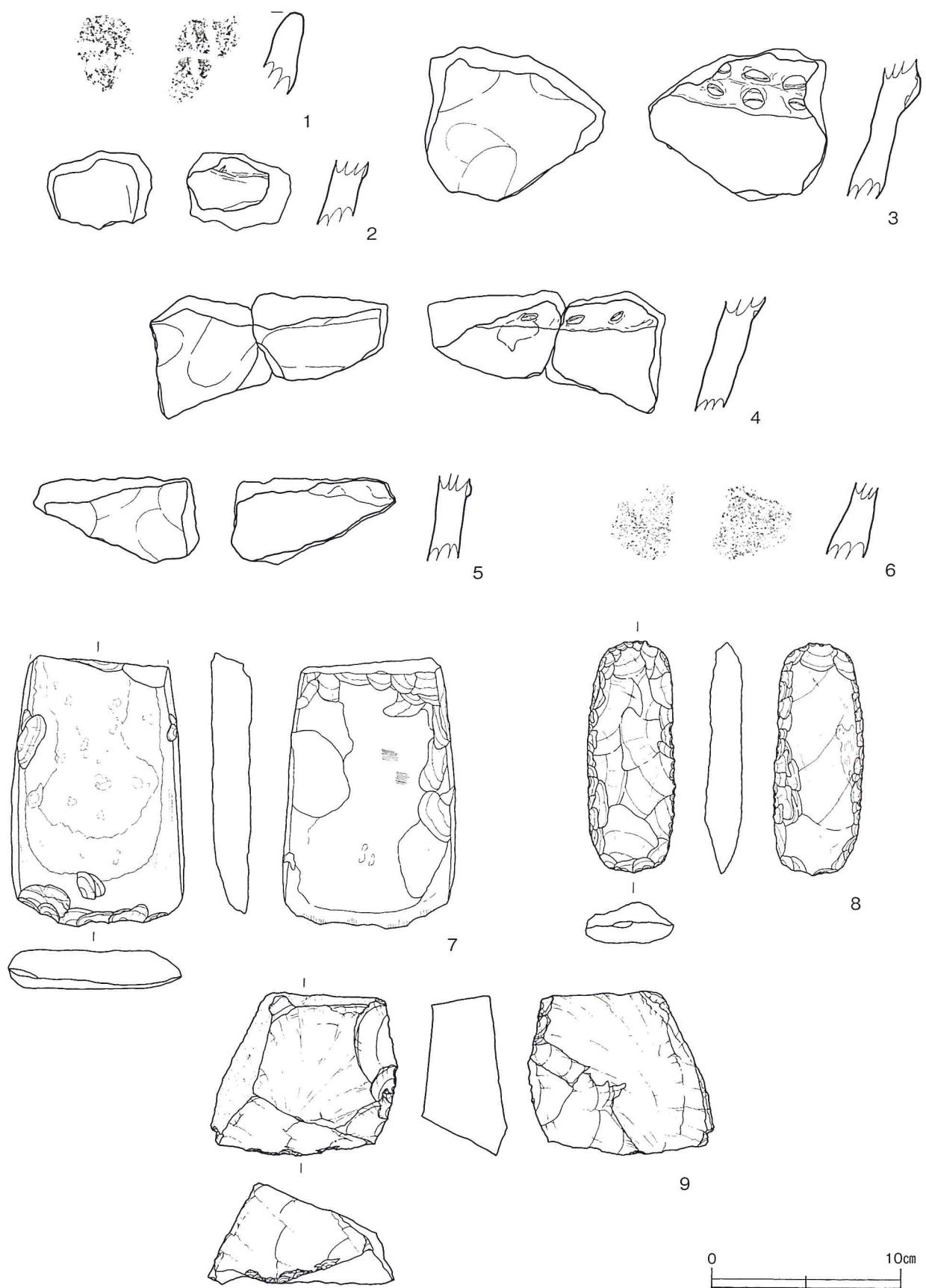
1は口縁部である。胎土には砂粒を多く含み、焼成が悪く非常にもろい。2~5はいずれも隆帶文土器の胴部片である。いずれも内面調整は指ナデで、指で押圧したと思われる痕があり、器面調整によるものと思われる。3は両側からつまむか、あるいは両側から爪で押圧して施文したことにより羽状を呈しており、その際に付いたと思われる爪痕が見られる。4も同様に爪で口縁部の方向に向けて押圧して施文しており、浅い爪痕が残る。2~5は胎土、色調とも似ており、また同箇所から集中して出土したことより同一個体と思われる。

#### 2 石器 (第12~14図 7~15)

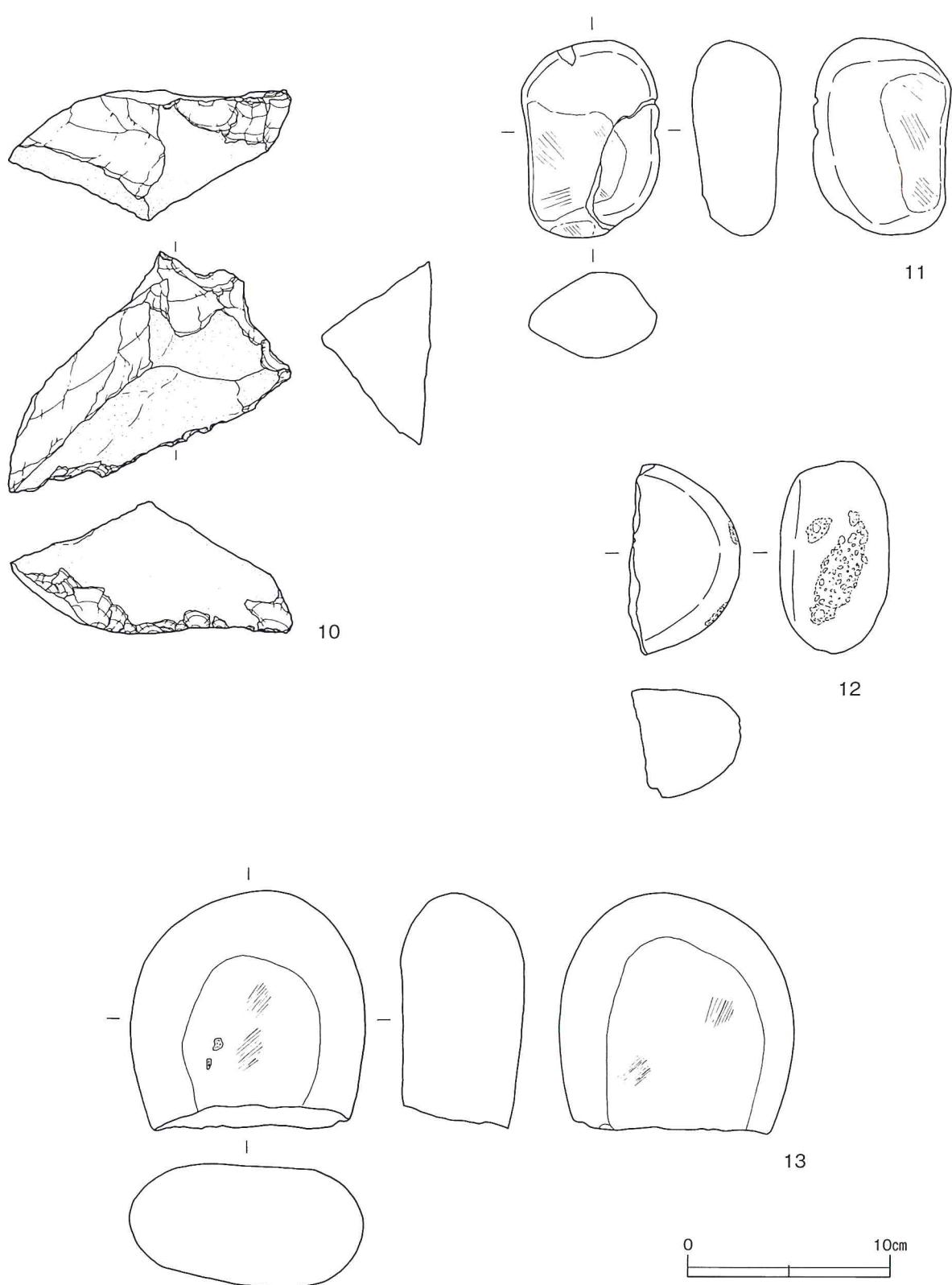
7, 8は石斧である。7は、石材は砂岩で長さ14.3cm、幅8.7cm、厚さ2.0cmと比較的大型の片刃石斧である。基部は欠損している。また、先端部分も欠損しているが、使用による欠損と思われる。左右両端部に若干剥離痕が見られるが、斧身を柄に装着するための抉りかどうかは判別できなかった。両側縁部及び刃部周辺には磨痕が見られるが、斧身中央部分から基部にかけては整形によると思われる敲打痕が見られる。裏面は両端部及び基部周辺に剥離痕が見られるが、風化しているため剥離痕の判別ができるものも見られた。ほとんど表面は剥落しているが、中央やや右端部よりも左端部よりにかろうじて磨痕が確認された。また、刃部に沿って若干磨痕が確認できる。8は粘板岩製の石斧で、7が扁平で角張っているのに対し8は長さ12.3cm、幅4.7cm、厚さ2.1cmのやや丸みをおびた形状を呈している。表面の風化が著しく、手で持つと表面が剥落してしまうほどもろくなっている。そのため整形痕の確認は困難である。裏面の斧身中央部分の右側端部寄りのところに縦方向の磨痕が

第12図 分布調査出土隆帯文土器

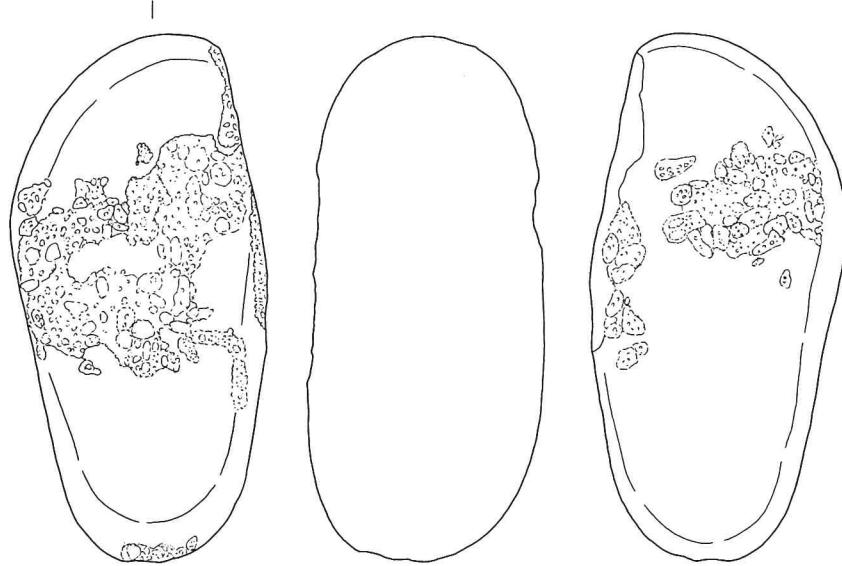




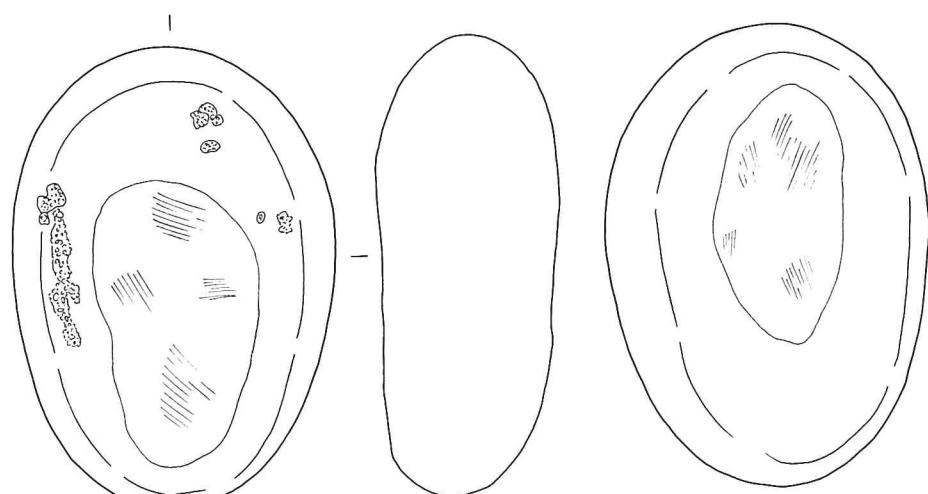
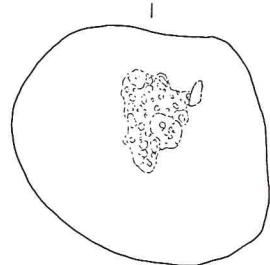
第13図 V層出土遺物(1)



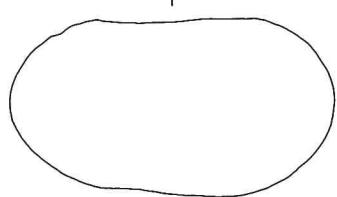
第14図 V層出土遺物(2)



14



15



0 10cm

第15図 V層出土遺物(3)

一部確認される。9, 10はいずれも砂岩製の礫器である。9は縁辺を打割し、できた鋭利面を使用している。10も縁辺を打割して整形し、出来た鋭利面を刃部として使用している。11は砂岩製磨石で、裏表に磨面が確認される。12は砂岩製敲石であるが、半分以上欠損しているため側面部の敲痕が確認できるのみである。13～15は砂岩製の石皿であり、いずれも裏表に使用痕が見られる。

### 第3節 IV層の出土遺物

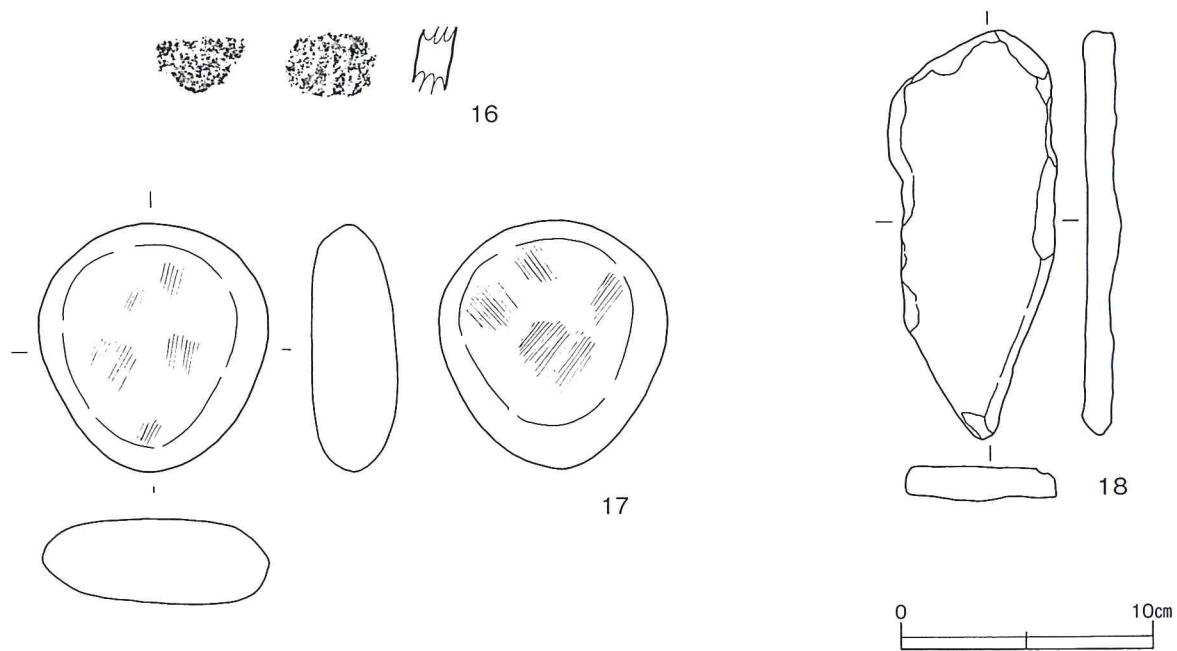
IV層からは、少量の遺物が出土した。

#### 1 土器 (第15図 16)

16は確認調査の際、2トレンチから出土した。小片であったため文様等は不明であるが、横峯D遺跡で出土しているその他の隆帯文土器とは胎土、色調等異なっている。

#### 2 石器 (第15図 17, 18)

17は砂岩製の磨石である。18は砂岩製の石皿で、厚さが1.3cmと薄い。全面にわたり磨痕が見られる。



第16図 IV層出土遺物

第3表 土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎 土				焼成	色 調		調 整		文 様	備考
				石英	長石	角閃石	砂礫		外面	内面	外面	内面		
13	1	A-1	V	○			○	悪い	黒褐色	褐灰色	ナデ	ナデ	-	口縁部
13	2	A-1	V	○	○	○	○	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	隆帶文	
13	3	A-1	V	○	○	○	○	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	隆帶文 両挟み押圧	
13	4	A-1	V	○	○	○	○	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	隆帶文 爪押圧	煤付着
13	5	A-1	V	○	○	○	○	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	隆帶文	
13	6	A-1	V	○	○	○	○	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	-	
16	16	2 T	IV	○			○	良好	橙色	橙色	ナデ	ナデ	-	

第4表 石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	出土区	層	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (kg)	石材	備考
13	7	石斧	6 T	V	(14.3)	8.7	2.0	(0.495)	砂岩	
13	8	石斧	A-1	V	12.3	4.7	2.1	0.162	粘板岩	
13	9	礫器	B-1	V	9.8	8.7	5.3	0.457	砂岩	
14	10	礫器	4 T	V	13.9	11.7	6.4	0.610	砂岩	
14	11	磨石	A-1	V	9.6	6.75	4.2	0.294	砂岩	
14	12	敲石	6 T	V	9.4	(5.45)	5.4	(0.290)	砂岩	
14	13	石皿	6 T	V	(11.7)	11.5	6.2	(1.210)	砂岩	
15	14	石皿	-	V	28.1	13.5	12.7	6.570	砂岩	
15	15	石皿	-	V	24.7	17.0	9.5	5.460	砂岩	
16	17	磨石	4 T	IV	9.8	9.1	3.4	0.455	硬質砂岩	
16	18	石皿	4 T	IV	16.15	6.6	1.4	0.195	砂岩	

## 第V章 まとめ

### 1 土器について

出土した土器は少量で、その大半は隆帶文土器であった。

これまで遺跡から出土している隆帶文土器を見ると、隆帶文に施される文様は大きく分けて3つに大別される。1つは貝殻による条痕を施したもので、2つ目は指頭で押圧し文様を施したもの、3つ目は棒状工具等の道具を用いて文様を施したものである。今回、分布調査で出土した隆帶文土器は棒状工具あるいは指頭による圧痕で施文されているのに対し、全面調査で出土した隆帶文は指頭による施文タイプのもので、両側から挟んでつまむあるいは押圧することで羽状に文様を施している。また、分布調査で出土した隆帶文上の指頭押圧は意識して爪痕を残しているのに対し、全面調査で出土した指頭押圧は爪痕を意識していないと思われる。これらのことから、分布調査で出土した隆帶文土器と全面調査で出土した隆帶文土器とは、施文方法を比較すると、必ずしも合わない。隆帶文土器は隆帶文の条数、文様などがバリエーションに富み、また出土する遺跡数も少ないため編年等に関して研究者の議論が交わされている。しかし、近年、隆帶文土器の出土例も増加し、少しずつその編年も組み立てられつつある。横峯D遺跡の縄文時代草創期の包含層V層には、サツマ火山灰がブロック状に混在する。このサツマ火山灰は堆積に上下動が見られるため確定的な事は言えないが、隆帶文土器は概ねサツマ火山灰よりも上位から出土する傾向が見られた。

### 2 石器について

種子島の縄文時代草創期における石器組成は、宮田栄二が「南九州型石鏃石器群」として石鏃等の狩猟具の他、磨石や敲石といった植物性食料加工具の割合の高さを指摘している（宮田 1998）。横峯D遺跡から出土した石器を見ると、石鏃といった狩猟に用いられた石器は確認されなかったが、石斧2点、礫器2点、その他磨石、敲石、石皿といった植物を加工するための石器は一様に出土しており、植物性食料を中心とした生業が営まれていたことが考えられる。

### 3 まとめ

今回、横峯D遺跡の調査面積は確認調査、全面調査合わせて約 240 m<sup>2</sup>であった。遺構は時代不明の溝状遺構が1条確認されたのみで、出土した遺物も極めて少量であった。土器に関しては、その大半が隆帶文土器でこれらの土器片はA-1区から一箇所に集中して出土した。これらの隆帶文土器片は胎土・色調等非常に類似しており、これらのことから一個体の隆帶文土器であると考えられる。石器に関しても出土量は少なく、種類としては石斧、礫器、磨石、敲石、石皿と前述したように植物を加工するための石器の比率が高い。種子島の縄文時代の遺跡では、総じてこうした磨石、敲石、石皿といった植物加工を目的とした石器が多く見られる。当時、温暖な気候により豊富な植物性食料が採集できることや、こうした石器の材料となる良質な砂岩や頁岩が比較的簡単に入手できる環境であったことがその背景として考えられる。

横峯D遺跡から直線距離にして約 500 m 南南西の方向に横峯遺跡（横峯C遺跡）がある。横峯遺跡は種子島で初めて旧石器時代の礫群や石器が確認された遺跡である。横峯遺跡は平成4年に調



第 17 図 種子島の隆帶文土器出土遺跡分布図

査され、その後遺跡の重要性から、平成8年より平成10年までの3年間再度調査が行われた。調査の結果、横峯D遺跡同様縄文時代草創期の層から隆帯文土器が出土している。横峯遺跡から出土した隆帯文土器は棒状のもので押圧して施文されている。南種子町において隆帯文土器が確認されているのはこの2遺跡だけである。今回横峯D遺跡の全面調査で出土した隆帯文土器は隆帯を指で両側から押圧し羽状に文様を施すタイプであったのに対し、分布調査で出土した隆帯文土器は指頭で圧痕を施すタイプのものであった。横峯D遺跡と横峯C遺跡とは、直線距離では約500m離れているが、標高はほとんど変わらない同一の尾根上に位置している。このことから、土器に施された隆帯文のタイプは若干違いが見られるものの、横峯遺跡、横峯D遺跡を含む標高約110m前後の尾根上の一帯に隆帯文土器を用いる人々が生活を営んでいたのだろうと考えられる。

現在、種子島において隆帯文土器が確認されている遺跡が8ヶ所ある。中でも西之表市の奥ノ仁田遺跡、鬼ヶ野遺跡、中種子町三角山I遺跡は竪穴住居跡等の遺構に伴い隆帯文土器が大量に出土している。17図を見ると、隆帯文土器を伴う縄文時代草創期の遺跡は比較的内陸部に位置しているのが分かる。縄文時代草創期は、氷河期を終えて徐々に暖かくなってきてはいるもののまだ比較的寒冷な気候であった時代であり、当時の海岸線は現在の海岸線よりも下がっていたと考えられている。これらのことから考慮すると、種子島における草創期の遺跡は、標高100mを越える、付近に深い谷を持つ山間に立地する傾向が見えるといえよう。比較的大型の遺跡が見られる縄文時代早期や後期の遺跡は、どちらかというと海へと臨む台地上に立地する傾向がある。

種子島における縄文時代草創期については、今まで遺跡数も少なくななか解明できない状況にあったが、近年の整備事業等に伴い隆帯文土器を伴う縄文時代草創期の遺跡数が増加してきている。遺構とともに大量の隆帯文土器や石器を出土した西之表市奥ノ仁田遺跡、鬼ヶ野遺跡、中種子町三角山I遺跡といった遺跡は、西之表市と中種子町との境付近の深い山間に比較的集中して立地している。この付近が草創期の生活の拠点であったのであろう。その一方で、横峯D遺跡、横峯遺跡といった南よりの地域で隆帯文土器を伴う草創期の遺跡が発見されたことにより、さらなる広がりが示唆されたといえるのではないだろうか。

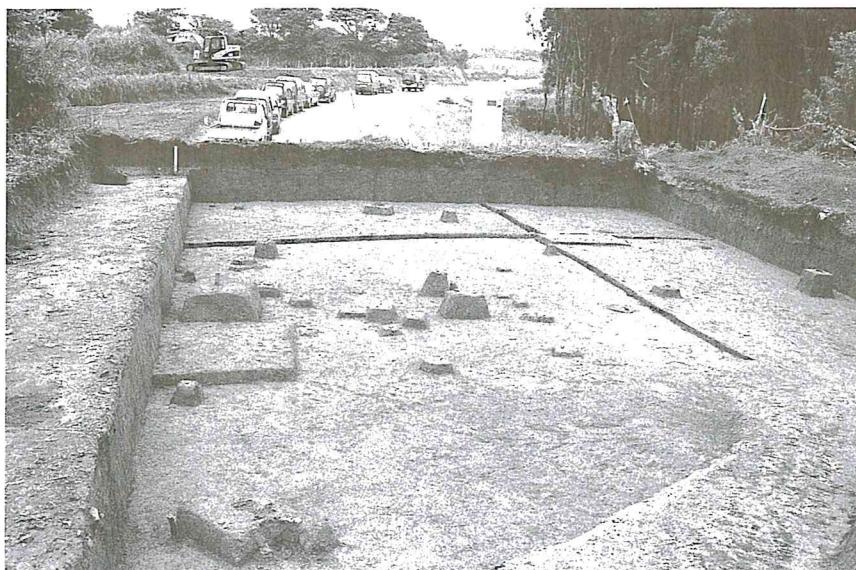
#### 参考文献

- |                               |                         |
|-------------------------------|-------------------------|
| 西之表市教育委員会 1995 「奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡」  | 西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(7)     |
| 西之表市教育委員会 2004 「鬼ヶ野遺跡」        | 西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(14)    |
| 児玉健一郎 1999 「南九州を中心とする隆帯土器の編年」 | 『鹿児島考古』第33巻             |
| 大久保浩二 1997 「瀬戸口遺跡採集の隆帯文土器」    | 『南九州縄文通信』第11号           |
| 宮田栄二 1998 「縄文時代草創期の石器群」       | 『南九州縄文研究』No.12 南九州縄文研究会 |

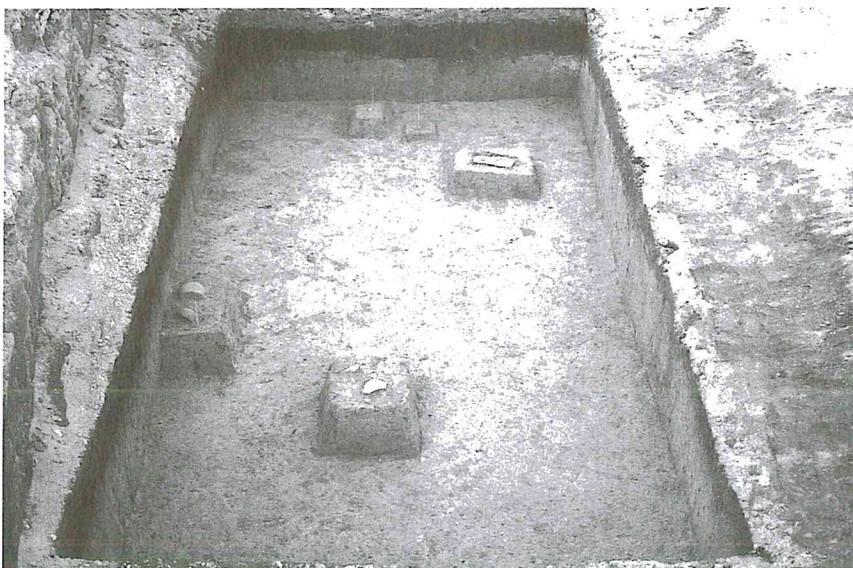


# 図 版





横峯D遺跡調査区



遺物出土状況

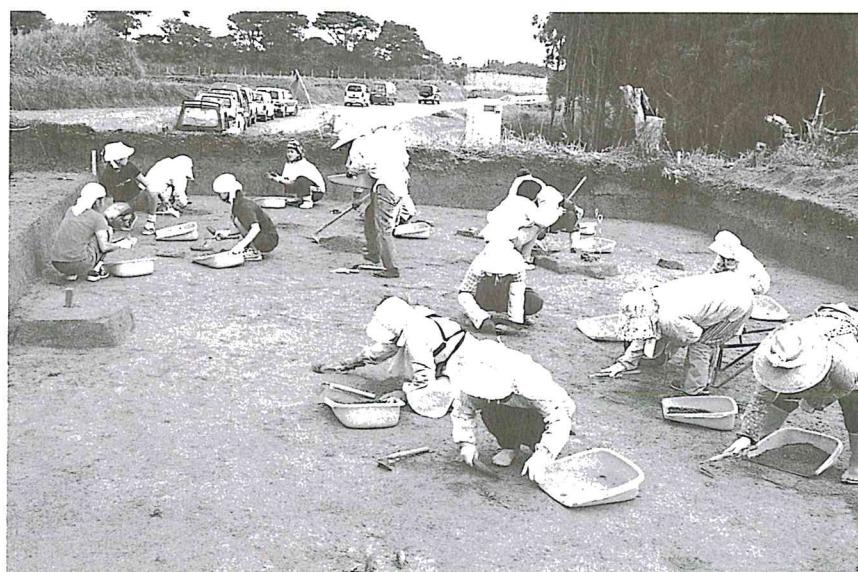


磨製石斧出土状況

図版 2



発掘調査風景



発掘調査風景

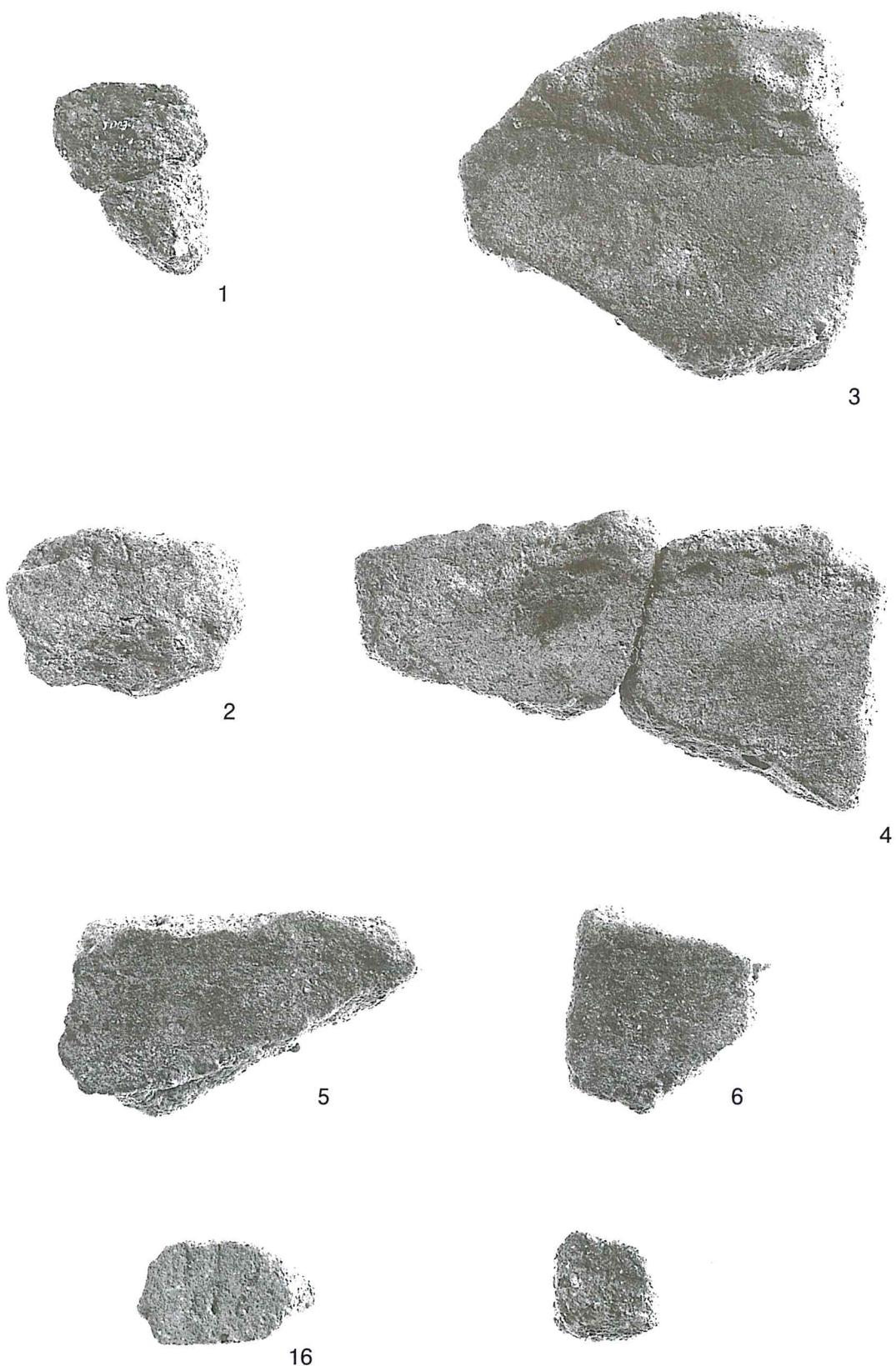


南種子中学校  
職場体験

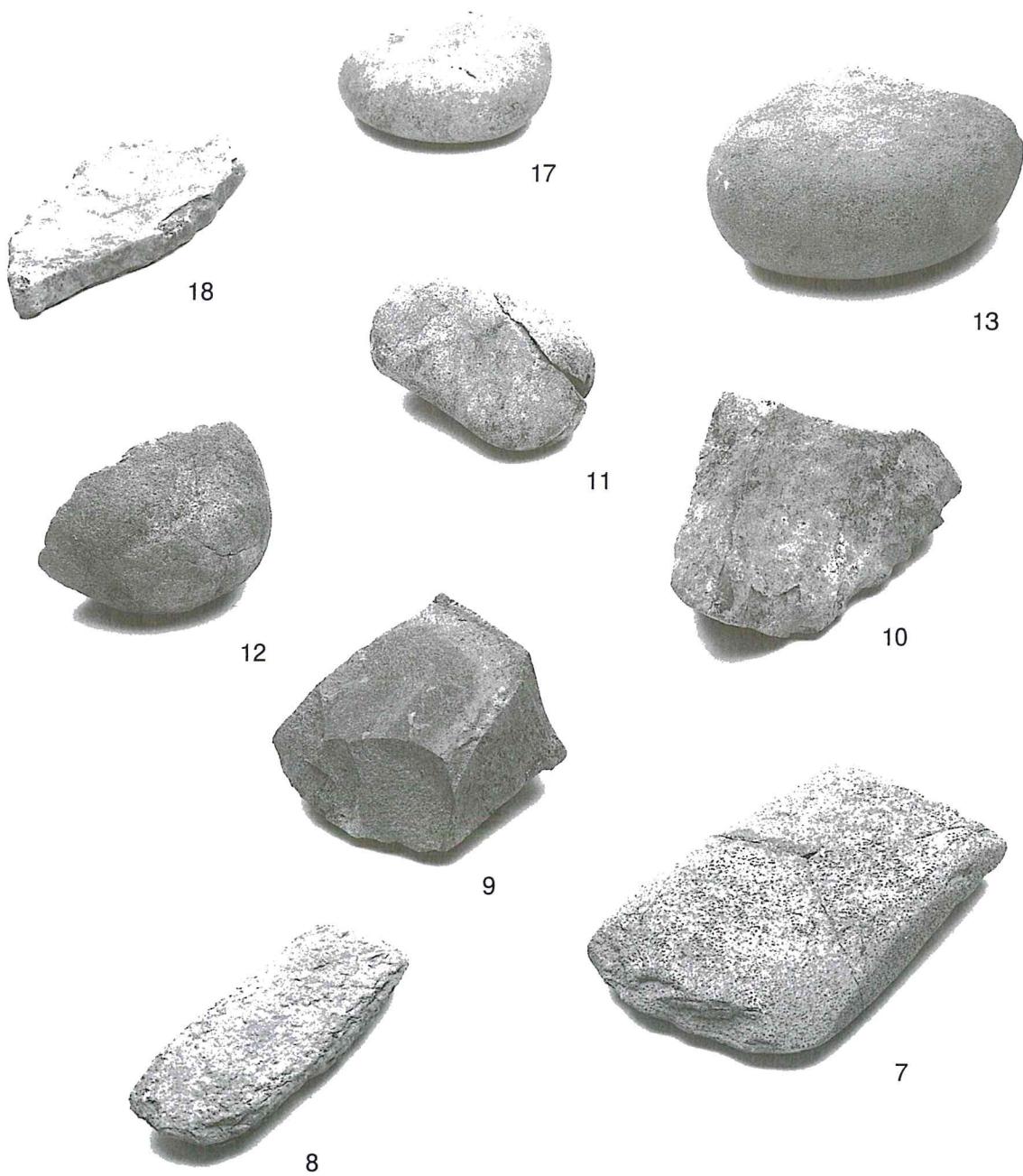


分布調査出土 隆帯文土器

図版 4



横峯D遺跡 出土土器



横峯D遺跡 出土石器

---

南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(13)

## 横峯 D 遺跡

発行日 2005年3月

発行者 南種子町教育委員会

〒 891-3792

鹿児島県熊毛郡南種子町中之上 2793-1

TEL 0997-26-1111

印刷所 株式会社 トライ社

〒 892-0834 鹿児島市南林寺町 12-6

TEL 099-226-0815

---



